

## 日本語6Aにおける作文導入の実践

成島 千智

【キーワード】作文・テーマ・ワークシート・プライバシー・話し合い

### 1. はじめに

日本語教育実践研究(5)(担当 小宮千鶴子教授)の実習クラスは早稲田大学日本語教育研究センター設置の別科日本語専修課程「日本語6A」(中級後期～上級レベル)だった。

クラスの学生総数は14人で、出身国は、カザフスタン1人、韓国6人、タイ2人、ドイツ2人、中国1人、香港2人、男女別では、男性2人、女性12人であった。

教科書は全10ユニットから構成され、鎌田修他(1998)『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』(ジャパントイムズ)を教科書として使用していた。各ユニットは「読む前に」「読んでみよう」「読んだあとで」「重要表現」「文法・語彙練習」という順序で提出されていた。授業では「読む前に」「読んでみよう」「重要表現」「文法・発展練習」「読んだあとで」の順で進み、発展的な内容の読解の後に作文の導入を行っていた。

その中で、語彙の説明をする「重要語」、読解に入る前の導入「読む前に」、読解後の「作文」の実習を4人の院生が担当したが、今回のレポートでは、筆者が担当した「作文」の実習について述べたいと思う。

### 2. 調査概要

#### 2.1 日本語6Aの作文指導

作文指導の際には、授業で扱うユニット1～9について各ユニットで400字～800字の課題作文を課し、ユニット9では600字の作文を課した。

作文指導の流れとしては、導入→記述→提出→添削→返却となっている。その中で、授業中に行うのは話し合いを中心とした導入、記述の最初までである。残りは宿題で提出は数日後となっていた。その後、教師が添削してから作文を返却する。

#### 2.2 ユニット9の作文テーマ

ユニット9の作文テーマは「私の大切な人」とした。ユニット9「読んでみよう」

のテーマが「閉じている？日本の子供」というもので、日本の子供が家族や地域社会などに対して閉じている気がするという内容だった。また、その後にある「読んだあとで」の話題が「日本人は親よりも友達に相談をする」という内容だったので、これらと関連した作文を書いてもらうためである。

「読んだあとで」の文章で出てきた「人間関係」「友人関係」「親子関係」という言葉を取り入れつつ、誰にでも身近に感じるテーマにしなければならないと先生からアドバイスをいただいた。そこで、親、友達、先生など、書ける人の範囲を広げて、先に述べたテーマに決定した。また、「一番大切な人」というテーマも考えたが、「一番大切な人」について他の人に言いたくない人や複雑な家庭環境の人にとっては、プライバシーにかかわる問題が出てくる可能性があったので、「大切な人」というようにして、自由に話し合ったり、書いたりできるように配慮した。

### 3. ワークシートの作成

#### 3.1 問題作成

①「大切な人」はだれか？②「大切」とは何か？③どうして大切なのか？という大きな問題3つをはじめに考えた。①～③の答えは、作文を書く人によってそれぞれ異なるので、その3つの項目を明確して、作文の構成をしっかりとすることで、作文を説得力のあるものにできると考えたためである。

はじめはそのまま問題にしていたが、最終的には、①の問題を出す前に、私たちの周りにはたくさんの人がいることを自覚させるようにした。さらに、②は抽象的で難しいので再検討した。③に関する問題も、例をつけてイメージが湧きやすいように工夫し、最終的には、【表1】の5問の問題を作成した。

【表1】ワークシートの問題

問題1	あなたの周りには、たくさんの人っていて、様々な人間関係が存在します。例えば親子関係や、友人関係などがあります。その他にも先生や近所の人、仕事の同僚などがあります。あなたの大切な人は誰ですか。
問題2	あなたが「大切」という言葉を使うときはどんな時ですか。
問題3	どうして、その人のことを「大切」だと感じましたか。(例：悩みを相談できる、など)
問題4	どんな時にその人のことを「大切だ」と思いましたか？その時の話を書いて下さい。
問題5	「大切な人」に、どんな言葉をかけたいですか。

#### 3.2. ねらい

院生には、ワークシートと一緒に「ねらい」を書いた資料も添付した。問題の答え

を導くために、適切な質問をして学生の話膨らませる時もある院生に、問題の意図を伝えることで、話し合いが効果的に行われることを期待して作成した。

【表2】 ワークシートのねらい

テーマ	誰にでも身近に感じられる話題で、友人や親、子供など、誰のことででも書けるようにした。
問題1	自分の周りにはたくさんの人がいることを認識させてから、作文の話題の中心となる「人」を決める。
問題2	人によって「大切」の捉え方が異なると思うので、それぞれの感じる「大切」がどのようなものかを意識化する。
問題3	なぜこの作文で「その人」を選んだのかを書くことで、自分にとって「大切」とはどういうことかをより深く考える。
問題4	具体的な場面を思い出して、どんな時にその人のことを「大切」と感じたかを書くことで、説得力のある作文にする。
問題5	作文の最後に、自分が「大切な人」のことをどう思っているのかを書く。

#### 4. 作文導入の授業

当日は、小宮先生による「読んだあとで」の解説後、筆者が「作文」の説明を5分程度行った。その後、他の院生3人にも協力してもらい、4グループに分かれて話し合いを行った。

説明では、私たちの周りには、たくさんの人がいるが、「大切な人」は、それぞれの人で異なり、その捉え方も各々で違うという内容を伝えた。説得力のある作文にするために、ワークシートを使用して何を書くのかを大まかに決めてから、他の人と話し合い、意見交換した後、作文を書くように指示した。

筆者の担当したグループは、KYさん、MHさん、Nさんの女性3人だった。「誰のことが大切か」(問題1)と聞いたところ、3人とも「相談できる人＝大切な人」だと思っていた。その後、それぞれは「大切」をどう捉えているのか(問題2)という質問をしたが、「読んだあとで」の内容と混同しているようだった。そこで、「人によって違っていいですよ。」と言ったところ、Nさんが「じゃあ、私は部長が大切です。」と言った。それから彼女は、以前の仕事の上司について、グループの人に話してくれた。

実習後に他の院生から聞いたところ、やはり同じところで混乱している学生が見られたようだった。また、問題3と4を一緒にした方が良かったのではないかと、という意見が出たが、やはり分けてよかったという意見も出た。

#### 5. 作文に利用されたワークシートの問題

【表3】作文に現れたワークシートの問題の答え

	名	問題1	問題2	問題3	問題4	問題5	利用数
1	B	息子	×	人生で一番すばらしい「作品」。	2.5歳の時には新聞が読めた。学校に入ってから「博士」と呼ばれている。	偉い人になるより幸せな人になってほしい。	4
2	C	友達	×	なぐさめてくれた。	辛いことがあった時。	×	3
3	G	父と母	×	一緒に笑ったり頑張った。	初めてGが歩いた時や話した時。	×	3
4	I	家族	×	つらい、苦しい時に家族が支えになる。	叔の電話で元気になる時。	抱きしめたい。	4
5	JJ	叔	×	いつも支えてくれるから。	冬の着物が足りなかった時、お金がなかった時。	「愛している」と言いたい。	4
6	JN	大学時代に知り合った人	家族と会社の仕事などを話す時。り合った人	心が安らぐ関係。彼が信頼できる。	スランプに陥った時。	×	4
7	KI	父と母	×	辛くても努力した。	家計が苦しかった時。KIを生んだ時片目を失明した時。	×	3
8	KY	兄	いつも側にいると感じさせる人。	根気良く話を聞いてくれた。	日本に留学して寂しくなった時。	仕事も恋も頑張って。	5
9	MA	友達	話が合い、互いに何でも相談できる人。	彼がいなくなったら損だし、不完全な感じがする。	引越しをして連絡が取れなくなった時。	×	4
10	MJ	ホストファミリー	×	一緒に苦労した。	自分を本当の家族のように扱ってくれた時。	×	4
11	MH	お父さん	×	アルバイトもせずにやりたいことに集中できたし、悩みも相談できる。	お父さんに相談したら、「ぴかっと光が見える」という気分になる。	いつもお元気で私が恩返しできるように長生きしてください。	4
12	N	日本人の上司	×	仕事も人生のことも教えてくれた。	日本で誰もいなくてもそばにいてくれる時。	ありがとうという言葉より感謝する気持ちを表す言葉がない。	4

提出された作文は 14 人中 12 人分だった。表を見ると、4 問利用(利用率 80.0%)8

人、3問利用(利用率 60.0%)3人、5問(利用率 100.0%)利用1人で、4問利用した学生が最も多かった。また、問題利用率は問題1が100.0%、問題2が25.0%、問題3が100.0%、問題4が100.0%、問題5が50.0%であった。作文の構成は問題1→問題3→問題4の構成が多かった。

Iさん、KIさんなど問題1で複数の人を話題にしていた。問題2は、「大切」の定義のはずだったが、きちんとした答えは1つもなかった。JNの答えは定義になっていなかった他、2人は「大切な人」についての定義をしていた。この反応は想像していなかったことで、作文を書く際の役に立っていなかったため、失敗したと思った。半数の学生が、「問題5」を参考にしていたが、Iさんは言葉ではなく「抱きしめたい」という行動を書き、問題5を使った作文の内容は感謝が4人(Iさんも含む)、激励1人、希望1人だった。思ったとおりにならなかった所もあったが、どのような言葉をかけるかという問い(問題5)には多様な表現が見られて、とても興味深かった。

## 6. 終わりに

今回のレポートでは、作文実習を行った際の過程と、その実習を受けた学生がどのような作文を書いたのかを報告した。

実習の教材を作成する中で、個人的な話をどこまで書くのかということについて、常に配慮しなければならないことを改めて感じた。今後の課題としては、作文を書くための適切な問題を教材にできるようにすることである。今回の教材では、問題2で求められている答えを1人も書いていなかった。この問題はかえって学生の混乱を招いてしまったかもしれない。

この実践と実習を通して、作文指導をどのように行うのかを体験することができて、とてもよかったと思う。ここで得た知識や体験を、将来に生かしていきたい。

## 【参考文献】

- 海保博之・柏崎秀子編(2002)『日本語教育のための心理学』新曜社  
小宮千鶴子(1998)「書くことの指導法」『ここからはじまる日本語教育』ひつじ書房  
村上治子(1990)「作文指導—授業計画とその実際」『講座日本語教育』25 早稲田大学日本語研究教育センター

(ナルシマ チサト 修士課程2年)